| | |
|---|---|
| 氏名 | 有賀　慎吾 |
| ヨミガナ | アルガ　シンゴ |
| 学位の種類 | 博士（美術） |
| 学位記番号 | 博美第468号 |
| 学位授与年月日 | 平成27年3月25日 |
| 学位論文等題目 | 〈論文〉　既知限界時間 － ポスト・ヒューマンはアートの夢をみるか？<br>〈作品〉　Blind Tactile Sense |

論文等審査委員

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| （主査） | 東京藝術大学 | 准教授 | （美術学部） | 齋藤　芽生 |
| （論文第１副査） | 東京藝術大学 | 准教授 | （美術学部） | 布施　英利 |
| （作品第１副査） | 東京藝術大学 | 教授 | （美術学部） | 坂口　寛敏 |
| （副査） | 東京藝術大学 | 教授 | （美術学部） | 小山　穂太郎 |
| （副査） | 東京藝術大学 | 准教授 | （美術学部） | 小林　正人 |

（論文内容の要旨）

アートとは何か。私の考え方では、社会システムの中の冗長性を引き受けるポジションにあるものであると捉えている。アートとは、社会システムが持つ冗長性により、新しいものが創出されるときに「パターンの破れ」として作動するものでもあるはずだ。つまり、社会システムの効率性や合理性から零れ落ちるような、ある種の人間の豊かさとして作動するものである。これが正しければ、どのようなアートがなされるかは、その時々の社会システムに依存するということだ。もちろん、その根拠はそういった「環境」の一方にだけに求められるものではない。アーティストという「主体」の側にも依存することも確かだろう。社会システムにおける「冗長性」に対応するものを、人間というシステムで考えると、それは脳における「可塑性」であると捉えることが出来るだろう。どちらも、何かが起こる前は静かにシステムの内部で余剰として潜伏しているが､何か特定の事件が起こったとき､それを契機にしてその機能を一挙に全景化させるものである。

本稿の主な目的は、そういった環境と主体の関係性について、いくつかのファクターを使って考察を試みることである。すべてのファクターはこの二者間の媒介項として付置出来るものである。

ここでは、そのうちのいくつかを紹介したい。

最も代表的なものは「パターン」である。パターンは環境と主体どちらの側にあるものだろうか。これは、本稿の始めから終わりまで重奏低音のように通底した捉え方として扱っているものである。

次にあげられるものは「時間」である。これもやはり環境と主体のどちらにも当て嵌まるもので、大別すると環境の場合は「客観的時間」として捉え、主体の場合は「主観的時間」として捉え、双方向からの考察を試みている。

最後は「経験」というファクターである。これも主体が環境と相互作用するときに現れるものだ。私達人間において、もっとも基本的な経験は「視覚経験」によってもたらされるものだろう。そこから本稿では「見る」という経験に的を絞って考察を試みた。

これらのファクターを用いて幾つかの基本的な事柄を扱った。また､「主体」と「環境」のそれぞれの捉え方を通常から逸らして変更を加えもした。例えば、主体を「ポスト・ヒューマン」や「既知限界時間」や「明滅する身体」などに置き換えたり、環境あるいは状況の方は「宇宙空間」であったり「パーソナル・ディアスポラ」であったりといった具合である。

これらすべての項目は、私なりに噛み砕いて説明してあるので、そこまで込み入った内容にはなっていないと願いたい。

（論文審査結果の要旨）

本論文は、ＳＦ的な科学と芸術が交差する視点からの、コンテンポラリー・アート作品の制作に取り組んでいる筆者が、近未来と現在の人間のありようを問いかけた論文である。

論文の構成は、全五章からなり、まず第一章「私とは何か？　世界の裂け目」では、人間にとって最も根源的なテーマである「私」というものについて、双頭という病理症例と、筆者自身の作品である双頭の土偶などを俎上にのせ、人間の「身体のイメージ」がもつパターンなどについて論じている。第二章では、筆者のキーワードの一つとなる「パターン」について解説し、続く第三章では、「既知限界時間」という本論文のタイトルにもなっている概念を使って、脳科学の知見なども援用しながら、人間の存在というものを定義する。そして第四章「複数化・多重化・断片化--見ることのパターン」において、宇宙への眼差し、身体への眼差しなどに言及しつつ論を展開し、最終章となる第五章「ポスト・ヒューマンはアートの夢をみるか？」で、近未来のポスト・ヒューマンのアートに思いを巡らし、また筆者自身の重要な色彩の問題である「黄色」の意味についても考察しながら、結論へと至る構成となっている。

上記のような内容の論文は、筆者がこれまで取り組んできた映像、立体オブジェ、インスタレーションなどの手法によるコンテンポラリー・アート作品を、その表層ではなく根源の部分へと掘り下げようという試みであり、博士展での展示作品と本質的な部分で呼応するものでもある。とくに筆者は、サイエンスの中でも、人間の体がもつ「身体性」というところに重きを置き、そのフリークスともサイエンス・フィクションとも捉えられる奇妙な身体像を造形することで、人類文明の未来への問いかけを試みている。

筆者は、同時代の、あるいは古典の美術作品など、美術の領域だけに、その知の矛先を限定せず、サイエンスや現代思想など、幅広いジャンルへの視点から、自身のテーマへと迫ろうとしている。つまり本論文は、筆者の単なる作品解説ではなく、美術作品とは別の、言葉による論文でなければ探究できない領域への思索のチャレンジにもなっている。その探究の姿勢は、最終的には、いつの日か、筆者の作品の深化として結実するものと期待できる。

つまり本論文は、筆者の美術探究にとって意義のある研究であり、論文の存在意義を大いに認められるものである。よって、有賀慎吾の『既知限界時間：ポスト・ヒューマンはアートの夢をみるか？』を、本学の博士論文として認め、合格としたい。

（作品審査結果の要旨）

博士学位審査展で展示された「Blind Tactile Sense」と題するインスタレーション作品は、申請者の独創的な発想である「代替不可能な身体としての主体」を現前させるために生み出されたものである。

展示室に双頭のヒトの形態を持つ大小様々な立体作品が、所狭しと博物館のコレクションの如く立ち並ぶ。壁面の２箇所とモニターでは、双頭の立体モデルによる身体と主体の時間軸を表現した映像作品が展開されていた。また、螺旋形や幹から分枝する形態の興味深いドローイング等も展示された。

申請者が修士課程以来展開してきた作品を俯瞰すると、既にそのころから一貫した態度と関心が顕著に現れている。自分とは何か？ポスト・ヒューマンとは何か？を問う思考行為そのものを形態化した表現活動は、作家の主観性を離れた地点で「強固な客観性を備えた表現」が志向されており、特に「双頭の遮光器土偶」の立体にそのことが強く現れている。また論考中の「既知限界時間」に対応する映像とそれに合わせた展示は、注視と長い熟考を経てはじめて可能であるような卓抜な構想と、ある種の考古学者とも言えるほどの多大な努力・労苦が隠されていて、申請者の表現活動が、作家と作品、思考と表現、事実と虚構などの重要なテーマを巡ってきわめて自覚的に展開されてきたことが窺える。

審査会では、これまでの一連の表現活動を踏まえて提出された申請者の作品が、独自の批評性と表現を獲得したものであり、博士の学位を認めるに相応しい優れたものであるという評価で全員一致した。

（総合審査結果の要旨）

多くのSF小説や漫画にインスピレーションを受けている有賀慎吾は、現実の認識を越えたところの「個」の拡張感を自身の身体に引き受けるような独特な感性を持つ。多様な知覚の可能性や世界認識モデルを次から次へと脳裏に挙げ、空想の中を流離いながら、その空想の産物を自分の手業によって現前させるような作品群を創りだす。

並べられた自作のオブジェ達はまるで、論文中にも登場する“オーパーツ”（OUT OF PLACE ARTIFACTS-「場違いな工芸品」、予期せぬ場所から発見される不可解な遺物）のようにも見える。提出作品『Blind Tactile Sense』のインスタレーション中央に置かれたのは、双頭の遮光器土偶だ。私達が発掘物から知り得るようないわゆる古代的特徴で描写されたそれは考古学的な遺物にも一見みえるが、現実には双頭の特徴を持った人間を描写した発掘物は実在しない。限られた発掘物によってしか過去を推測出来ない私達の認識の限界に対し、このような「双頭の特徴を持つ人間の在り方が基準であった過去」の遺物からの「架空の歴史」の読み解きを提示し、未知の世界認識の可能性を彼は投げかける。

「胴体ないし頭蓋が結合する双子」のイメージは、論文『既知限界時間：ポスト・ヒューマンはアートの夢を見るか』冒頭にも触れられるが、彼にとって大事な思考の源泉である。彼はその身体を、社会におけるある種の不自由な身体モデルとして考えるのではない。「意識や身体反応のうちどちらかは複数のそれでありどちらかは単一のそれである」という自身の知り得ぬ知覚の可能性として、真摯に注目しているのだ。双頭の双子が同時に単語を発し続け一致と不一致を提示するイメージの映像や、双頭の骨格標本なども作品中に含まれている。その他、性差や五感のすり替えをイメージに入れ込んだ、現代の一般的身体認識を裏切らせるような映像群やドローイングを、まるで現在・過去、未来が混濁した時空の博物館のように陳列している。

タイトルにあるとおり有賀は“ポストヒューマン”、つまり人間存在の後に台頭してくるであろう何らかの知性体を念頭に置いてイメージを創出している。作品を支配する黄色と黒の二色は彼の作品の最大の特徴でもある。人工知能やアンドロイドが可能となったポストヒューマン時代において「身体が私という表明にはもはやなり得ぬ」時代の複合的自己を示す識別記号色としてそれを演出している面もあるが、他方では彼自身が言語化出来ない肉体の嗜好や欲望に関係ある色として、その色に取り巻かれる自己をまるで実験モデルのように知覚しながら作品制作を進めている部分もあるようだ。

奇妙に整理された記号性と生々しく生存の不穏をかき立てる身体性を同時に持ち合わせる、特異な作品の世界観が、全員の指導教員に評価された。論文は未だ未消化な部分もあり新たな身体知覚を模索するキーワードを出す作業に終始している感があるが、作品に沿った作家独自のスリリングな証言を孕んだ優れた記述もあり、その点が評価され、作品・論文ともに合格とした。